『レイプ・オブ・ナンキン』合成写真掲載

【写真】人の姿、影などが明らかに合成したものと判断できる箇所（白線で指摘）の写真＝アイリス・チャン著『レイプ・オブ・ナンキン』より

米国でベストセラーとなったアイリス・チャン女史の著書『レイプ・オブ・ナンキン』では二十四ページに亘って写真が紹介されている。これら「南京事件」のモノとされる写真の殆どは偽物、またはキャプション改竄の〝やらせ〟写真であることが判明しているが、中には合成写真すらある。

同書に使われている合成写真は「UPIのベトマン氏」が提供者となっているが、朝日新聞社刊の『南京虐殺の現場』では一中国人が拾ったとされており、河出書房新社刊『死者が語る戦争』では新華社提供となっている。

この写真は実は二種類あり一枚は簡単な合成。もうひとつは合成写真の完成度をより高くしたもので、チャンの写真は後者の方。合成初期の写真で、中央左下の鉢巻きをしている男性の上を見ると兵士が白と黒の隙間に挟まれているところがある。これが右と左の写真を合成した時に出来た歪みである。

もうひとつは後ろで見守っている兵士達の視線を見ると二、三名の兵士が注視しているが、良く見ると視点がおかしい。通常見学者というのは動いているものに注目するはずだ。

兵士達の中には外套を着ているように、当時の南京は相当に寒かった。だが作業をしている兵士は鉢巻きに薄着である。腕まくりなどは不自然といわざるを得ない。今まさに埋められようとされている背広の人物は硬直しており、穴の深さと釣り合わない背の高さだし、影もおかしい。右手前の土砂の影のつき方もおかしい。

不自然な点をいくら挙げても尽きないが、結論としてこれは合成写真であることが判然とする。歪みや写真の濃淡の違い、また影などを誤魔化す事が出来なかったのである。

（松尾一郎）